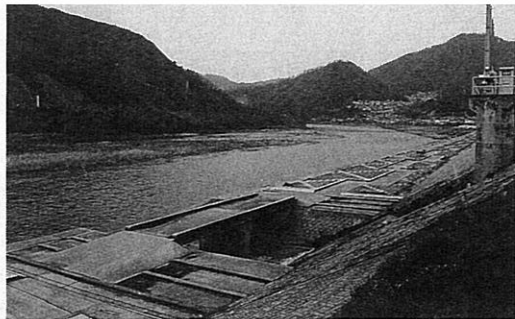
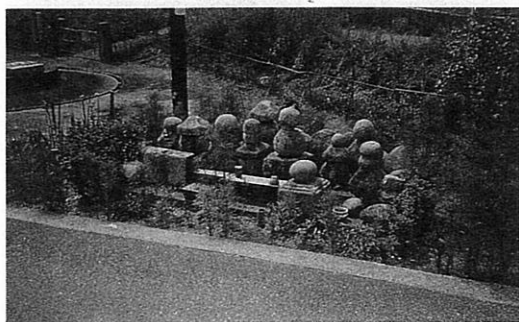




徳行寺



八木渡し付近



五輪塔



医王寺

(二) 道筋と現状

可部から鈴張まで

(幕之内峠)

現在、可部から鈴張へ向かうには国道一九一号線で飯室を経由して国道二六一号線を通るのが最も便利である。しかし、飯室を経由するようになったのは近代になってからである。ここでは近世、近代、現代の可部から鈴張までの街道を区別して記述する。現代の街道は現在の国道に、近代の街道は主に旧国道に相当する。

近世の街道は現在のJ R可部線に沿っている県道宇津・可部線にあたり、広島市中心部から国道五四号線を北上するとJ R可部線をまたぐ可部陸橋を越えて最初の信号を左折する。

この付近は条里制の遺構が認められる地域で、『新修広島市史第一巻』によれば国道一九一号線が条里地割の北限近く、県道宇津・可部線が南限近くにあたる。しかし、それぞれ条里方向と少しずれて通っている。

しばらく行くと県営および市営の河戸住宅があり、その南に医王寺がある。医王寺には薬師堂があり、「杉薬師略縁起」なるものが伝わっている。「縁起」によると養老年中(七二七—七二七)行基がこの場所にやってきて、三奇杉木の祥瑞に目をみはり、これは末世の衆生済度の先非意味不明、前兆の意味かなりと悟り、この尊像を彫り一堂をなした。人が多く集まり、奇験は信心深い人に霊験あらたかであったが、やがて世の移り変わりとともに忘れられた。この堂は太田川のほとりにあったので洪水のために流されることが何度あったが、毎度夢に感じるので、強信を起こし、雨露に朽ちてしまうことを歎き、一字を造立し、ほかの像に彩色し、古佛を奉納したという。さらに申伝えには、本尊を彫った杉の株へ松の枝を挿しておいたところ、その松が接いで繁茂し、大樹となっていまにあるといい、この松の枝は逆に挿したので、松枝は逆についているという。「郡中国郡志」には詳細に「杉薬師縁起」を記載しているが、



西光寺跡



献燈



道標

『芸藩通志』の記述は実にそつけなく、「廃医王寺 下四日市村にあり、今薬師堂あり」とあるのみである。おそらくこの「縁起」に信憑性がなかったため（行基が勅をうけて国分寺をつくったなど）『芸藩通志』には記載しなかったのではないだろうか。しかしこの医王寺を「杉本薬師」といい、杉の株へ松の木を逆に挿し木したなど、神と木の関係からすこぶる興味深い。

下四日市には徳行寺がある。惣社宮の別當で、もと真言宗であったが、慶長六年（一六〇二）了念という僧が、真宗に改宗し、広島報専坊の末寺となった。徳行寺の境内には惣社大明神があった。惣社は神武天皇が逗留した跡へ建立したものと伝えられ、毎年三月十五日に祭祀を行い、大毛寺村の社人末田美濃守が雇われ神事を行ったという。

また、ここから太田川の土手に出た辺りに地藏と五輪塔がある。地藏は三体あり、うち二体には寛政十二年、文政八年と刻まれている。大和重工の付近にあったものを移設したと言われるが、いわれなどは不明である。

まっすぐ西へ進んできた街道は大毛寺川の手前で右折する。梶山義憲氏宅（亀山丁旦）の角には大正十三年（一九二四）に立てられた「左ハ川筋今井田ヲ経テ加計ニ通ス」、「右ハ大毛寺ヲ経テ飯室鈴張ニ通ス」と刻まれた道標があり、飯室方面と加計方面への分岐点を示している。

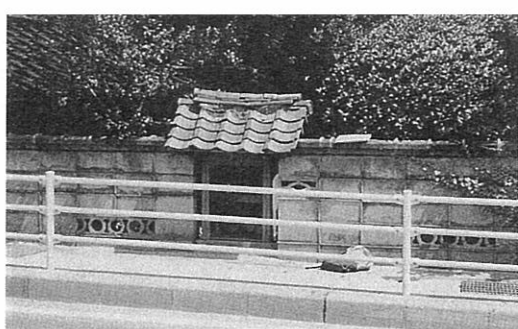
街道は大毛寺川の左岸を北上し、左手に虹山団地を見ながら進む。その一角に両延神社がある。街道からこの両延神社へ向かう参道の角には献燈と西光寺観音がある。

西光寺跡 観音堂一宇、梁桁二間茅葺、福王寺抱とある（『郡中国郡志』）。

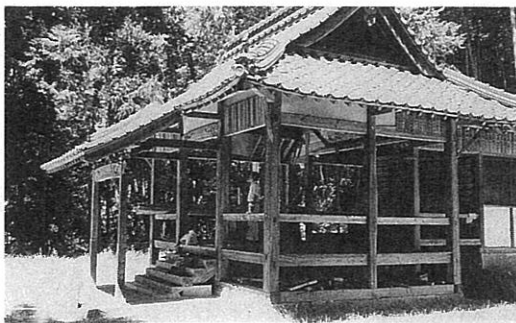
両延神社は白石山八幡という。建久元年（一一九〇）武田朝信が宇佐八幡宮を下四日市に勧請したという。建長五年（一二五三）九月二十九日武田信時が白石山に遷したと伝え、文政の頃には廊下・拝殿・御旅所・宝蔵・鳥居があり、境内には武内宿禰・伊勢二所大神・日本大小の神祇・



前勝木八幡神社



荒神さん



大坪八幡宮



幸神さん

愛宕・菅ノ社・天満宮・稲荷・伊多神・武田霊神の九社があった。氏子は大毛寺村・両四日市村・両中野村・可部町・水落村・九品寺村・南原村・綾ヶ谷原村・勝木村・今井田柳ヶ瀬村の一二か村であった（『郡中国郡志』）。

さらに西に進むと、義経橋のたもとで国道一九一号線と合流する。ここから遠坂峠までは国道に沿って進むことになるが、しばしば旧道を通過する。国道に沿う河原久光氏宅の歩道側に荒神さんが見られる。かつては河原氏宅の敷地内にあったが、国道の拡幅工事によって現在地に移設されたものである。この地域は昔大畑の奥の八幡谷から発生した水害によって川原となった。この荒神はそれを鎮めるためにつくられたという言伝がある。

国道の右手斜面には幸神さんと前（表）勝木八幡神社がある。

前勝木八幡宮 梁桁九尺 茅葺で山県郡穴村の社人末田数馬抱であった。拝殿・鐘撞堂があり、九月二十九日が祭日であった（『郡中国郡志』）。

左手に大規模な住宅団地の造成工事を見ながらしばらく登り坂を行くと遠坂峠にさしかかり、行森へと下って行く。行森には大坪八幡宮がある。

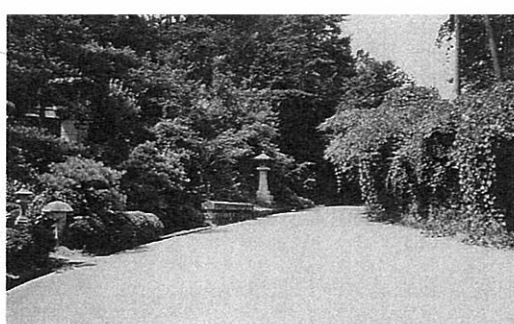
行森大坪八幡宮 茅葺・拝殿・石の鳥居があり、この宮は尾首城主松浦甚五左エ門が勧請したといい、広島松浦徳三郎により九月十九日に祭礼があったという（『郡中国郡志』）。

さらに西に進んで行くと、上行森で右手への分かれ道がある。ここで国道をまっすぐ進めば幕之内トンネルを通過して飯室の市街地へ向かう。この道は昭和二十九年に幕之内有料道路として開通したもので、歴史は浅い（『安佐町史』）。右手に進むと曲がりくねった道を進んで幕之内峠に達する。

明治初期に広島県内の街道は車馬の通行が可能ないように大幅な改修が行われ、幕之内峠の改修は明治十八年から十九年にかけて行われた。こ



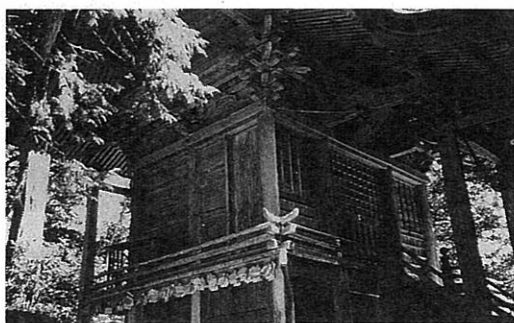
坊地ヶ峠の石碑



幕之内峠



源徳水神宮



土井泉神社

の時まで石見往還は可部より可部峠を越えて山県郡本地へ達していたが、これを廃して可部から勝木、飯室、鈴張を経由する迂回路線を採用した（「可部町史」）。峠の手前には地藏と常夜燈があるが、地藏の多くは近年周辺地域から集められたものと思われる。

峠を過ぎて下って行くと広島自動車道をまたぎ、広島北インターチェンジの脇をぬけて飯室の町並みに降りてくる。町並みに入ってすぐ右手の山頂部に土井泉神社があり、街道から石段が続いている。

土井八幡宮は御神体は大神宮（本地は阿弥陀と応神天皇とであるという。崇徳院の時代、天承元年（一一三二）甲斐国より移したと伝える。往古は宇津にあったものを土井の城主が退転した跡に移したと伝えるが、その年号は不詳である。文政年間には、拝殿・廊下・鳥居があった。天文十年（一五四二）熊谷在直より河野甚五左エ門が神主を命ぜられ、以後はその子孫がそれを勤めた。土井古城主三須刑部神田寄付の文書あり。のち現在地へ移転、土井と称す。神田は慶長六年（一六〇二）の検地により没収されたという（「郡中国郡志」）。

（坊地ヶ峠）

坊地ヶ峠は、馬車が使用されるようになり幕之内峠に主要交通路が移るまで、可部から飯室方面へ行く峠道であり、上行森から谷筋に上がって行く。現在は行森谷からの道は夏草が茂って途中までしか通れないが、冬枯の季節は道が現れて通行することができる。松本しずえ氏（安佐南区八木）は鈴張から三人へ行くのにこの峠を通っていたといい、所要時間は三時間だったという。峠の北側には石碑が立っているが、その表面に文字はない。石碑の東側には三段の石垣がある。南側にも石垣の跡らしいもの、手水鉢らしきものがある。坊地ヶ峠の南側には昭和初年頃茶店があったとされ、これらの石垣などがそれにあたるものと思われる。茶店は飯室の沢井医院の隣の西本商店（現宮本）が経営しており、みかん水やいちご水を二、三銭で売っていたという。



養専寺と燈籠、道標



燈籠と道標



沢井医院横の道標

峠を過ぎて飯室まで下る道は幅一間の良い道である。その途中、高速道路を過ぎる手前に源徳水神宮（すいじんさん）があり、その周囲には大きな石が散在する。すいじんさんは約百年前に雨乞いのために建立されたものといわれ、場所は当時と変っていない。鳥居は平成二年に設置された新しいもので、付近の人々が掃除などの世話をしている。

さらに下って高速道路の下をくぐり、谷の北側山麓の細い道を通って飯室の町に降りていく。国道二六一号線沿いの沢井医院の角には坊池ヶ峠への道を示す道標がある。これは明治四十三年（一九一〇）に立てられたものであり、「可部近道」と刻まれている。明治四十年頃には馬車は坂の緩やかな幕之内峠を、徒歩は距離の近い坊池ヶ峠を通って可部方面に向かっていったことを物語る。

一方、飯室の町では幕之内峠からの道と国道二六一号線が合流する地点、つまり養専寺の前に燈籠と道標が並んで建っている。燈籠は飯室村の勝川清一郎と中丸真次郎によって明治四十三年に建てられたもので、道標とともにコンクリート製のブロックによって自動車の衝突から守られている。道標は大正八年（一九一九）に建てられ、宇津、安野、加計町、祇園村、山県郡本地村、島根県界、可部町、三川村古市、広島市などへの距離が刻まれ、飯室が交通の要衝であったことを示している。また、養専寺は明応八年（一四九九）に順知が広島水主町へ開基したが、のちに飯室へ移転されたと伝えられている（『安佐町史』）。

鈴張川沿いの国道を北に進んで行くと、鈴張川をはさんだ右岸の標高約一二〇メートルの小高い丘の上に龍王さんがある。

飯室から北上してきた国道は烏帽子を過ぎると鈴張川の峡谷を抜けて鈴張の町へ達するが、かつてはこの道はなく、清水峠を通っていた。峠の付近には中世の山城である恵下城があったが、現在は森城団地という住宅団地が造成されているため、当時の地形はまったく残っていない。団地南側の斜面に烏帽子から団地へ上がる細い道が残されているだけで



燈籠



道標



龍王さん



胡子堂

ある。

森城団地から鈴張への取り付け道路が中国縦貫自動車道をくぐるトンネルで抜けたあたりから、再び街道を確認できる。ここから鈴張川左岸の山麓部を通って若宮堂の前を通過し、鈴張郵便局の辺りに出てくる。そして国道と鈴張川に挟まれたところを通過して、広浜橋に達する。

現在の国道二六一号線は旧街道の鈴張の町並みの部分約五〇〇メートルを迂回して通過している。そのため、街道沿いに古い家や土蔵などが残されている。また、胡子堂や付近には横山神社もある。鈴張市の成立は近世福島時代にさかのぼると考えられ、十七世紀中ごろまでは毎月六度のいわゆる六斎市がたてられていた（『安佐町史』）。

山本賢三氏宅（安佐北区鈴張）の軒先には道標が建てられており、「大正二年四月中旬建之」「是ヨリ可部ヲヘテ広島」「是ヨリ本地村八重」「是ヨリ吉坂村原村」「寄付者弓場作一 中村 古本 山口興右エ門」と刻まれている。もとは数百メートル上流の市大橋のたもとに建てられていたが、水害で流されて河原に止っていたものを、山本賢三氏が一九九〇年に自宅前に立てたといわれる。

長覚寺は鈴張川を挟んで旧街道に面している。文明八年（一四七六）、円空の開基で真言宗極楽寺であったが、その子道空が約一〇丁南へ移転して長覚寺と改称した（『安佐町史』）。

鈴張の町を抜けると川の土手を通ったり、国道二六一号線と交わったりしながら明神峠へと登っていく。鈴張小学校の一〇〇メートルほど東の国道二六一号線沿いには大正十四年に建てられた燈籠がある。さらに、その四〇〇メートル東の榎の太木のもとに地蔵堂がある。東谷川の左岸を通る旧道が川をわたって坂道をのぼったところであり、ここでよく車が川に落ちる事故が起るため地蔵堂を祀っているという。地蔵は二体あり、一体が自然石である。

鈴張から明神峠までは明治初期までの峠道、馬車が走り始めてからの



植松峠



地藏堂



厳島大明神

旧国道、現在の国道、中国縦貫自動車道が狭い谷を平行して走っており、明治以降の交通機関の発達とそれに伴う道路の変遷を目のあたりにできる。

明神峠への峠道は現在の国道、旧国道と同じく谷の西側斜面を通っている。峠道は徒歩によるため、自動車交通を前提とした現在の道路のように緩やかな勾配である必要はなく、距離が短いことが重要であった。国道、旧国道とも明神峠の手前は大きなヘアピンカーブで蛇行しながら上って行くが、峠道はこちらの蛇行している部分をショートカットしてほぼ直線的に斜面を上がっている。しかし、国道によって分断されたり、現在は通行する人も少ないために、そこが峠道であったと確認するのがむずかしいところも多い。

明神峠は広島市と千代田町の境をなす峠で、明治十九年に道路改修が行われ、浜田との輸送路として重要性を増した。峠にある明神は厳島大明神であるが、峠の塞の神でもあり、また化け猫退治に関する民話も残されている（『安佐町史』）。『安佐町史』所収の「鈴張の三金剛の化猫退治」の話は、石見の民話として残っている「可部峠七つぎ松」の話と同じ内容のものである。柳田国男は『桃太郎の誕生』で甲斐や越後のいぬ繋ぎの元の形が芸州可部峠の「猫のつぎつぎの話」であるといっているが、このことは道の往来の盛んであったこと、この街道が全国各地と結びついていたことを物語るものである。

（植松峠）

鈴張から可部方面に徒歩で行く場合、飯室を通して坊地ヶ峠や幕之内峠を越えるよりも、畑から大畑に抜ける植松峠を越えて行く方が近道である。可部方面からは勝木から綾ヶ谷の谷筋に入って行く。

大畑には土井神社や薬師堂、祠堂がある。

土井神社の拝殿には大正六年（一九一七）の「義経と弁慶」の絵馬がある。燈籠は明治四十三年十月寄進のもの、鳥居は明治四十二年の寄進で



亀山発電所



祠堂（大畑）



道標（大畑より植松峠への入口）

ある。境内に石碑があり、嘉永元年（一八四八）十月、氏子中が石段を寄進したことおよび頭取・世話係の名前が刻まれている。

植松峠への分岐点には現在二本の道標が立っている。一つは大畑農協バス停たもとにあり、「是ヨリ右ハ谷和道 左ハイムロスバハリ道」、「明治四十二年三月十一日 中野直 建」と刻まれている。もう一つは橋のたもととの叢のなかにあり、「大正十五年四月」「南ハ可部道」「西ハ飯室鈴張道」「東ハ福王寺三入大林道」と刻まれている。なお、大畑から植松峠に上がって行き、峠付近で左に折れると坊地ヶ峠近くを通過して飯室の町に抜けることができた。両者とも飯室鈴張道と刻まれているのはこのことの表れである。下田佐太郎氏（飯室）によれば、昭和の初め頃、大畑や綾ヶ谷へ働きに行くとき坊地ヶ峠から植松峠付近に出て大畑に出る道を通ったといい、夜遅く帰るときは夜道で虚無僧や女性に出会ってこわい思いをしたことがあるという。

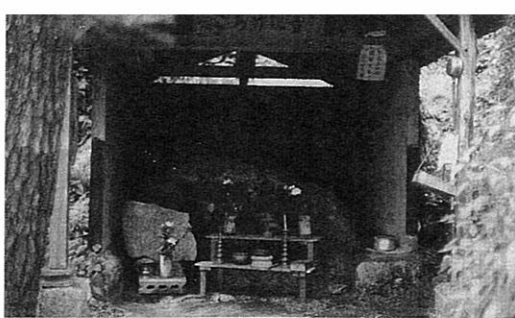
植松峠は熊笹の茂る道で現在は山道のみである。松本しずえ氏（安佐南区八木）によれば平素は坊地ヶ峠を通過していたが、可部の福王寺への参詣のときに植松峠を通ったという。

（太田川左岸―宇津―飯室）

かつて太田川の中流部では川筋の集落をつなぐのは村伝いの小道ぐらいで、人や物質の輸送は主として舟運に頼っていた。太田川筋で道路整備が行われるのは明治以降である。

亀山二丁目の梶山氏宅の角にある道標を右折しないで県道宇津・可部線を直進すると、JR可部線を横断し、燈籠と神社社（しんぐうしや）が道路の両側にある。

太田川の左岸に出ると川に面して赤レンガの建物である亀山発電所が見えてくる。亀山発電所は明治四十五年に建てられ、昭和四十八年まで発電所として利用されていたものである。現在は太田川漁業協同組合の事務所として使用されている。



轉観音



宇津の観音堂



柳瀬八幡宮

さらに県道を進むと柳瀬八幡宮が道路沿いにある。以前は隣接する宮崎明氏宅にあったが、その建物を現在地に十数年前に移転した。現在の建物は昭和五十七年に再建したものである。

太田川は柳瀬の部分で大きく蛇行しており、道は平坦ではあるが距離的には非常に回り道をする。そこで荒下から茶臼山の北を通って今井田に抜ける峠道を通るのが近道である。轉観音は峠から今井田への下り道にある。「郡中国郡志」によれば、大石に観音像が彫りつけられ、弘法大師が作ったものだという。往古はカンラン滝山にあったものが、大地震のさい谷底まで転落したものだという。

今井田山崎神社は県道に面しており、本殿は約七、八メートル高い位置にある。

県道は太田川の上流に遡っていくが、これまで主要な街道ではなかったため、道幅はあまり広くなく、車の離合が困難なところもある。毛木で県道下佐東線と合流して一〇〇メートルほど行くと右手に石碑がある。「石碑鎮一兵衛弘化四未年五十廻忌」とある。

宇津はその地形的な条件のため何度とも水害に見舞われた集落であり、急流で筏が折れたり、浸水したりする難所でもあった。しかし、また古くから太田川舟運の港の一つで、木材の集散地として栄えたところでもある。

宇津の観音堂は国道一九一号線・JR可部線と鈴張川に挟まれた所にある。観音自体は石でできた古いもので、水の中にあった観音を力の強い男が引き上げて現在地に建てたといわれている。また、かつては観音堂から川までなだらかな坂になっており、そこが川の流れが緩やかなところ場となっていたために木材の集積場所となっていた。建物は昭和十二年頃に建てられたものといわれ、浄国寺が四月十八日、七月十八日にお経をあげにきている。

現在、宇津から飯室までは鈴張川に沿って直線的に国道一九一号線が



浄国寺



権現社

走っているが、かつての街道は北側の山麓を通っていた。現在の国道の路線はかつて里道であったが、明治三十一年に整備されたものである（『安佐町史』）。宇津の国道から約二〇メートルほど入ったところに権現社がある。石柱に刻まれた年号は大正十三年である。

しばらくいくと左手に緩やかに上っていく道に出会う。この道を行くと永正八年（一五二二）に正学（正覚）が宇津に開基した浄国寺があり（『安佐町史』）、道は山麓の細い道を進む。

一般的に鈴張方面に抜ける場合、必ずしも飯室の町中は通らなかつたようである。つまり、清和中学校の下を通って最高寺橋のたもとにでるが、これを渡らず左折して少し上流の上富士橋を渡り、すぐ左折して川沿いの道を上流に上っていった。

上富士橋を渡った正面の広電安佐営業所の南西角には燈籠があり、「天保十二年九月吉日」と刻まれている。

飯室小学校からいずみ保育園までは川沿いの道ではなく、田の中の農道を通り、飯室郵便局の北で国道二六一号線と合流する。また、飯室の町を通らずに上畠から猪之子へ抜けるじょうげ峠もあった。

（赤木昌彦・土居晴洋）